

コシの四隅突出型墳丘墓

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 前田, 清彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/6669

コシの四隅突出型墳丘墓

前田清彦

1 はじめに

「四隅突出型墳丘墓」は弥生時代中期～終末期に山陰・山陽地方において盛んに造営された墳墓で、文字通り方形主丘部の四隅が外方へ突出している区画墓である。そして、弥生時代後期後半～終末期には、北陸地方（越＝コシ）においても造営され、日本海側の歴史的交流を象徴する遺構として注目されている。

『記紀』に見られるように、ヤマト王権に意識された日本海側諸地域の最も古い区分は、出雲（イツモ）、丹波（タニハ）、越（コシ）である⁽¹⁾。このうち『出雲国風土記』にみえる国引き説話、ヤマタノオロチ説話、オオナモチによる越の八口の平定説話、出雲国古志郷説話など、イツモとコシの関係は非常に密接と理解される。そして、コシにおける四隅突出型墳丘墓の造営はまさにこの歴史的交流を象徴するものと説かれ、これに異論を唱える者はいない。しかし、その歴史的意義の実像に関してはいまだ定説をみていない。つまり「どのような人々が、何のために、イズモ様式の墓をコシに造ったのか？」という命題に対する回答である。

この遺構について私は、かつて発掘調査を担当した「報告書」の考察編（前田 1993）において検討したことがあるが、旧稿から 10 年余が経過し、調査事例が増加して新たに検討すべき資料も累積された。そのような中で、最近この四隅突出型墳丘墓に関する発表の機会を得たので⁽²⁾、その発表要旨に若干の補足を加えて私の見解を整理しておきたい。

2 コシにおける四隅突出型墳丘墓の概要

まずは最新の資料をもとに現在の状況を整理しておこう。

① 分布と造営時期（表 1、図 5）

コシの四隅突出型墳丘墓は、平成 19 年 5 月現在で、「越前」に 3 遺跡 10 基、「加賀」に 1 遺跡 2 基、「越中」に 4 遺跡 7 基、計 8 遺跡 19 基が確認されている。「若狭」・「能登」・「越後」には現在までのところ報告例はない。このうち「若狭」は、丹後・丹波＝タニハとの歴史的交流が強く、特に弥生時代においては越前以北

と様相が異なるため、四隅突出型墳丘墓を造営する基盤はないと予想する。「越中」ではいわゆる婦負地域の丘陵部だけに集中している。

造営時期は、弥生時代後期後半～終末期（2世紀～3世紀前半）に集中する。この前段階（弥生時代後期前半）の北陸は山陰の強い影響下にあり、山陰の土器が北陸へ大量に流入し、これを基盤として後期後半に北陸の特色をもつ土器群が成立する。したがって、伊ヅモからの強い文化的影響を受け、コシの弥生時代後期後半が展開したと言えるのであり、そのような文化的系譜の先にコシの四隅突出型墳丘墓が造営されたのである。また、コシにおいて四隅突出型墳丘墓が造営される時代は、列島各地で様々な大型墳墓（首長墓）が造営される段階であり、防衛的集落（高地性集落、環濠集落）が営まれる段階である。つまり、稲作農耕の発達を基盤として各水系を単位に「首長」が誕生し、それらの各々が社会的緊張関係を迎えている段階と言える。さらに、四隅突出型墳丘墓の終焉と同時に畿内・東海系の土器を伴った前方後方（円）墳が造営され始めることから、ヤマト・オワリ勢力がコシを席卷する前段階まで造営されていたと解釈することができる。

② 内容（表1）

規模は、主丘部が一辺4.4 m（小羽山47号墓）から、一辺45 m（南春日山1号墓）⁽³⁾までである。つまり在来の方形周溝墓と同規模のものや、埋葬施設・副葬品から首長墓と想定されている一辺20～30 mクラスの方形台状墓に劣るものもあり、四隅突出型墳丘墓のすべてが必ずしも首長墓とは言えない。

埋葬施設は、小羽山墳墓群でのみ確認されている。小羽山30号墓（図1）では5.3×3.0 mの墓坑内に3.5×1.0 mの組み合わせ式箱形木棺が納められている。また、墓坑上面に赤色顔料をすりつぶした石器と大量の祭祀土器があり、島根県出雲市西谷3号墓（四隅突出）（渡辺1992）との類似性が指摘されている。この小羽山30号墓はコシで最古段階（法仏式）の四隅突出型墳丘墓であり、長方形の主丘部、短小な突出部など、伊ヅモの四隅突出型墳丘墓に近い様相を有している。

副葬品は、小羽山墳墓群でのみ確認されており、小羽山30号墓では鉄製武器＋多量の玉類という組み合わせであるが、これは四隅突出型墳丘墓以外の一般の方形首長墓と基本的には変わらない。なお、コシにおけるいずれの四隅突出型墳丘墓においても土器祭祀は北陸在地の土器群を使用しており、山陰の土器は出土しない。したがって、伊ヅモの人々がコシの四隅突出型墳丘墓の造営に直接的に関わったという物証はない。

外部施設は、つとに指摘されているように、山陰・山陽で必ず見られる貼石・列石がなく、周溝によって外形を作り出している。極めて重要な問題であるが、これまでの研究においては、この貼石・列石の欠落についての具体的な議論は活発ではないようだ。

3 四隅突出型墳丘墓造営墓地の構造

一部の研究には、「四隅突出型墳丘墓は特別な墳墓である」という前提で議論を進めているものが見られるが、私はこの立場をとらない。つまり、四隅突出型墳丘墓と言えども基本的には一部の地方で盛行した墳墓様式に過ぎず、外部構造のみを捉えれば北九州の甕棺墓や近畿の方形周溝墓等と同列に扱われるべきものである。さらに注意しなければならないのは、山陰や山陽地方においても弥生時代墳墓のすべてが四隅突出型墳丘墓ではなく、方（円）形の周溝墓・台状墓・墳丘墓も存在するという点である。そういう意味で、コシにおいては在来の周溝墓群と共存する事例が多いので、集団墓地における四隅突出型墳丘墓のあり方を検討してみよう。

① 小羽山墳墓群（図1）

越前北部の福井市（旧清水町）に所在する。造営時期はいわゆる法仏式内に収まる比較的短期間に造営された墳墓群で、45基の区画墓中、8基が四隅突出型墳丘墓で他は周溝墓（もしくは台状墓）である。つまり、すべての墳墓が四隅突出型墳丘墓ではなく、同じ墓地を造営する造墓集団⁽⁴⁾内にも四隅突出型墳丘墓を選択する集団と方形周溝墓を選択する集団がいる。そして、26号墓・30号墓など大型墓が四隅突出型墳丘墓であることを考えると、前者が主体的に墳墓群を造営したと言えよう。また、四隅突出型墳丘墓には規模が極小な幼少児用（33号墓）と思われるものがある一方で、大型墓（首長墓）もあり、首長およびそれより下位の構成員（幼少児含む）も四隅突出型墳丘墓を造営していると理解できる。ここでは埋葬習俗として四隅突出型墳丘墓を造営する集団が墓地造営に参加していると評価できよう。

② 旭遺跡群（図2）

加賀北部の白山市（旧松任市）に所在する。42基の弥生墳墓中、大型墓にのみ四隅突出型墳丘墓が造営されている（21号墓、38号墓）。すなわち、月影Ⅰ式段階に四隅突出型墳丘墓である21号墓が造営され、方形周溝墓がそのまわりに造営されていく。そして、月影Ⅱ式段階にはそれらの南側に新たに38号墓（四隅突出型墳丘墓）が造営され、同様に方形周溝墓がそのまわりに造営されている。ここでは、墓群の契機であり核となる墳墓にのみ四隅突出型墳丘墓が選択され

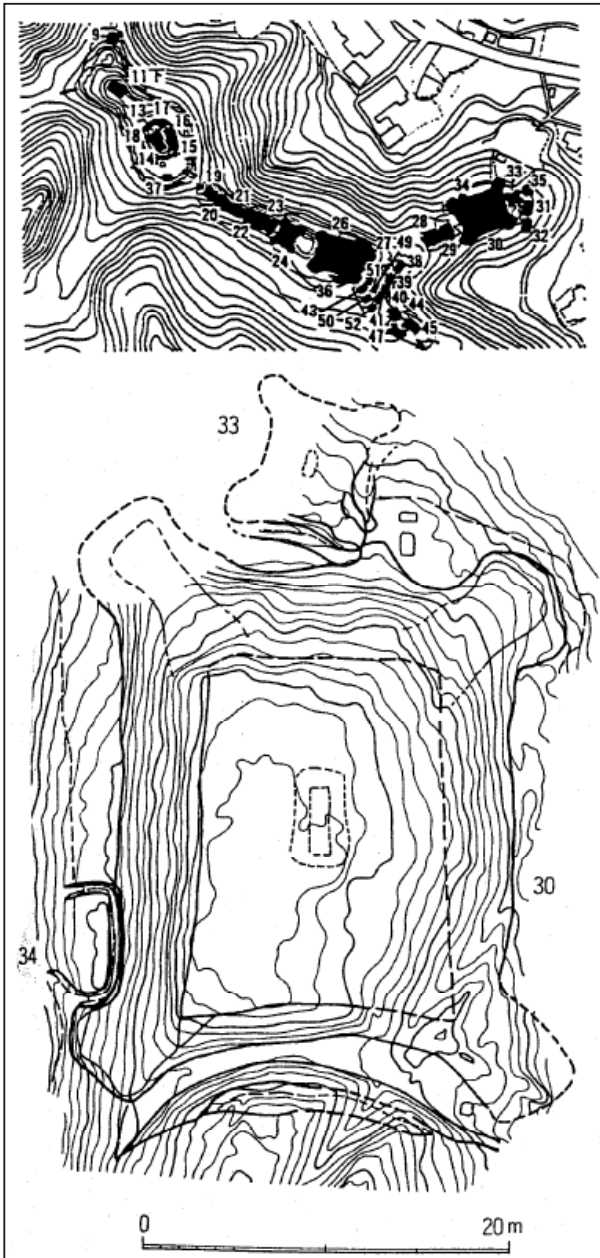


図1 小羽山墳墓群（全体図および30号墓）

て、それ以後の（下位の）墳墓は方形周溝墓を造営するという特徴がある。

③ 千坊山遺跡群（図3）

越中東部の富山市（旧婦中町）に所在する。いわゆる婦負地域において四隅突出型墳丘墓を集中して造営する遺跡群である。これらは単一の墳墓遺跡ではなく、各々500m程度の距離を置いた独立した墳墓群が2～3kmの範囲内に分布し、法仏Ⅱ式～月影Ⅱ式段階において計7基の四隅突出型墳丘墓を造営する。富崎墳墓群・鏡坂墳墓群では首長墓クラスの四隅突出型墳丘墓が2～3基ずつ造営されている。付近に周溝墓群は検出されていないので、四隅突出型墳丘墓のみの墓地と捉えられようか。この意味で、千坊山遺跡群の北方

2kmにある呉羽山丘陵では、四隅突出型墳丘墓（杉谷4号墓）と方形周溝墓群（杉谷A遺跡）が一定の距離を置いて検出されており、首長墓である四隅突出型墳丘墓と下位の方形周溝墓が別々に造営されていると評価できる。

このように、最古段階の小羽山では埋葬習俗として四隅突出型墳丘墓を造営する集団の存在が垣間見れるが、それ以外の旭や婦負地域では大型墓（首長墓）のみに採用され、象徴的な位置付けで造営されているようだ。山陰地方でも、後期後半以降は、四隅突出型墳丘墓がより限定された墳墓として造営されており⁽⁵⁾、埋葬習俗を超えたある種の政治的所産として広く日本海側を通じて四隅突出型墳丘墓が造営される時代と言える。

4 四隅突出型墳丘墓造営の歴史的意義

本稿の命題を極めて単純化するならば「他地域の墳墓様式が何故造られているのか」というところに本質がある。周知のとおり、墓の造営は極めて社会的な産物であり（大林1977）、一定の墓を造るためには一定の意思で結ばれた社会集団が存在しなければならず、この場合はコシの各地域にイヅモの四隅突出型墳丘墓を造るという意思を共通に有する社会集団が存在していなければならない。そして、まず第一の問題は彼らがコシの人々なのか、イヅモからやってきた人々なのか、である。要点を繰り返すと、以下の3点になる。

- ① コシの四隅突出型墳丘墓には貼石・列石がない。
イヅモで例外なく施工される貼石・列石の欠如は、コシにおいては意図的にそれを選択したと考えざるを得ない。
- ② コシの弥生墳墓には貼石・列石の伝統がない。
コシにおいては、古墳の葺石が登場するまで、墓に石材を使用する埋葬習俗はなく、したがって、コシの人々にとって重要な意味を持たない貼石・列石が切り捨てられたのではない⁽⁶⁾。
- ③ コシの四隅突出型墳丘墓からイヅモの土器は出土せず、コシの祭祀土器が出土する。

以上から、少なくともイヅモの人たちがコシにおいて四隅突出型墳丘墓を造営したという積極的根拠は見つからない。

次に、イヅモ→コシ地域間交流の可能性を想定すると、a「交易」、b「通婚」、c「移住」、d「侵略」、e「政治的交流」などが挙げられ、その結果としての墓の造営を考えた場合、以下のように解釈される。

a「交易」

文物の交流を目的とする活動であるから、イヅモから社会集団としての移動はないし、したがって

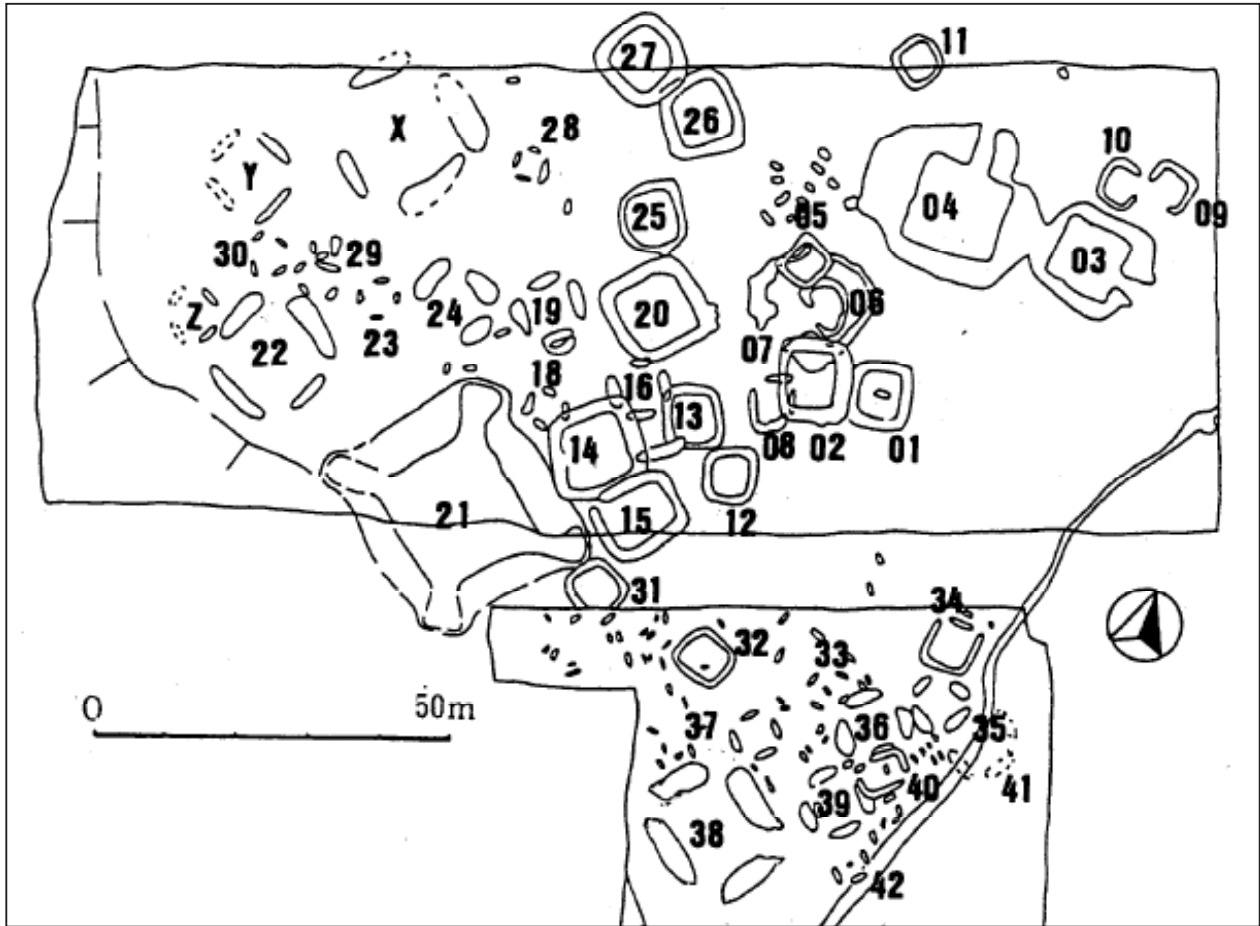


図2 旭遺跡群（墳墓群全体図）

コシで不時の死を迎えてもイツモの墓は残らない。

b 「通婚」

婚姻関係は社会集団同士の交流であるものの、実際の人の移動となると個人レベルの交流だから、現実的に墓に表現される要素は棺の種類などに表現されると考えられる。実際に、小羽山墳墓群の36・39・44号墓（いずれも四隅突出ではない）から丹後地域に特徴的な「墓壇内破碎土器供献」が検出されており（古川 1991）、タンゴの人がコシに通婚していることが推定されている。しかし、イツモの人々がコシの墓に葬られているという資料は皆無である。

c 「移住」・d 「侵略」

いずれも社会集団としての人的移動があるから故地の墓が造られる可能性が高い。しかし、イツモの人たちがコシに移住（侵略）してきて四隅突出型墳丘墓を造ったならば、そこには貼石や列石があるか、イツモの土器が出土するはずである。しかし現実にはその痕跡は全く見当たらない。自明のことであるが、コシに適当な石材がないわけではないので、そこには貼石・列石を施工しないと

いう明確な意思があるように思われる。

e 「政治的交流」

政治的友好関係あるいは同盟関係にあり、これを基盤に人的移動がある場合である。島根県出雲市西谷3号墓では、多量の祭祀土器のなかに、吉備地方の土器とともに北陸あるいは丹後系の土器が存在するらしい（渡辺 1992）。コシ（タンゴ）の人々がキビの人たちとともにイツモの墓前祭祀に参列したと言われているが、そうだとするとイツモとコシの首長間には政治的友好・同盟関係があったと評価できる。しかし、これまで見てきたようにコシの墓前祭祀にイツモの人々が参列することはなかったようだ。

以上のように検討すると、コシに四隅突出型墳丘墓を造営したのはコシの人々以外には考えられない。

次に、第2の問題であるが、何のためにコシの人々はイツモの四隅突出型墳丘墓を造営したのか。この問題を解く鍵はやはり造営時期にあると思われる。前述のように、弥生時代後期前半にはイツモから多くの人たちがコシに渡って来たと思われるが、この段階では四隅突出型墳丘墓は造られなかった。コシの社会はずでに弥生時代中期から方形周溝墓・台状墓を造営して



図3 千坊山遺跡群 (富崎1・2号墓)

いたから、区画墓を造営しうる社会的成熟は実現させていたはずである。よって、社会的に未成熟なために四隅突出型墳丘墓を造営できなかったという説明はできない。むしろ、コシ社会は区画墓造営社会であったが、イヅモの人々が四隅突出型墳丘墓を造営する社会集団を形成できなかったのである。ところが、およそ2～3世代後の後期後半以降、コシの広い範囲で四隅突出型墳丘墓が造営される。この段階は、各小地域の首長権が互いに緊張状態を迎え、ヤマト・オワリ勢力の触手がコシに延びつつあった時代である。こうした状況において、コシの地域首長はイヅモとの関係強化を切望したのではないだろうか。四隅突出型墳丘墓という墳墓祭祀を執り行うことにより、コシ内部あるいは対ヤマト・オワリに向けてイヅモとの関係性を主張したのであり、その最大の目的は、イヅモの鉄資源および金属加工技術等の確保であったと考えられる。

ただし、コシのすべての首長権がイヅモ系譜を志向したわけではなく、福井市原目山墳墓群や金沢市七ツ塚墳墓群などでは、いわゆる方形台状墓の形態をとる首長墓を採用しており、イヅモとの関係を必要としない首長が存在したことも事実である。白江式段階まで一貫して四隅突出型墳丘墓を造り続ける越中婦負地域と、方形台状墓に転換する越前北部の相違は、古墳時代において前方後墳が卓越する越中(婦負)と大型前方後墳が卓越する越前北部との対比に連なり、示唆的である。

5 おわりに

コシの四隅突出型墳丘墓は、弥生時代後期後半～終末期における大変革時代を背景に、イヅモとの系譜あるいはイヅモとの友好同盟関係を主張するためにコシ

の人々が造営した墳墓である。

小羽山墳墓群で推定された埋葬習俗として四隅突出型墳丘墓を造る集団は、コシ社会においてイヅモとの関係性が高まるなかで、前代にコシに土着していたイヅモ系の人たちの地位が上昇した結果なのかも知れない。また、現象面ではいち早く越前が四隅突出型墳丘墓を受容し、その墓制を東方(加賀・越中)に配布したと見えるが(古川1994)、婦負地域でも法仏式段階の四隅突出型墳丘墓が確認されたことから、コシの各地でほぼ同時期に四隅突出型墳丘墓が出現する可能性が出てきたし、何よりも当時の越前が加賀・越中に対して(墓制を配布するほどの)優位にたつ理由が見つからない。コシの各地域がイヅモとの歴史的交流のもとで造営したと考える方が自然である。

註

- (1) イヅモは旧国「出雲」よりも広い、いわゆる山陰地方を示しているようである。同様にタニハには丹波・丹後そして若狭をも含んでおり、コシは越前～越後の広大な地域を指しているようである。
- (2) 富山市教育委員会埋蔵文化財センター2006年王塚・千坊山遺跡群国指定記念「婦負の国弥生フォーラム」資料
- (3) 福井県永平寺町南春日山1号墓については、土取り工事のため台状部四隅がほとんど削平されており、四隅突出型墳丘墓と認定するには問題がある。正報告書が未刊であるが、その規模が正しければ、島根県出雲市西谷3号墓をも凌ぐ規模となる。
- (4) 墳墓の造営に関わる社会集団を一括してこのように捉えている。本文中でも述べているが、墓の造

営は極めて社会的な産物であるから、個別の棺の造営、区画墓の造営、区画墓単位群の造営、そして墳墓群全体の造営にそれぞれの規模の社会集団が関わっている。

- (5) 複数の共同体が、社会的連帯の強化が必要なときに造営されるもの、との評価もなされている(妹尾1993)。
- (6) 一方、丹後は貼石墓の伝統を持っているので四隅突出型墳丘墓が造営されてもよさそうだが、現在までのところ検出例はなく、むしろ造営しない地域と予想されている(肥後2006)。これは、タンゴには朝鮮半島との直接ルートがあり、鉄資源等をイヅモ経由で入手する必要がないからと考えられている。

【引用文献】

大林太良 1977年 『葬制の起源』 角川書店
 妹尾周三 1993年 「四隅突出型墳丘墓について—出現の要素と貼石方形墳丘墓からの概観—」『古文化談叢』30上
 前田清彦 1993年 「四隅突出型墳丘墓と弥生墓制」『旭遺跡群Ⅲ』石川県松任市教育委員会

古川 登 1991年 「北陸地方における墓壇内破碎土器供献」『古代但馬と日本海』但馬考古学研究会
 古川 登 1994年 「北陸型四隅突出型墳丘墓について」『大境』16号
 肥後弘之 2006年 「丹後から見た弥生首長墓の誕生～四隅突出型墳丘墓を築かなかったクニ～」富山市教育委員会埋蔵文化財センター 王塚・千坊山遺跡群国指定記念『婦負の国弥生フォーラム』資料
 渡辺貞幸 1992年 「西谷墳墓群の調査Ⅰ」『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』

【墳墓資料引用文献】

福井県清水町教育委員会 1997年 『小羽山』ほか
 ※弥生時代墳墓についての正式報告は未刊。
 石川県松任市教育委員会 1995年 『旭遺跡群』
 婦中町教育委員会 2002年 『富山県婦中町千坊山遺跡群試掘調査報告書』
 山陰考古学研究会 1997年 『四隅突出型墳丘墓とその時代』第25回山陰考古学研究会

墳墓名	所在地	規模(m)			埋葬施設	副葬品	年代
		台状部	含突出部	高			
越前							
小羽山21号	福井市	不明	不明	不明	不明	不明	法仏式
小羽山22号		9.0×6.0	9.2×8.6	1.2	不明	不明	法仏式
小羽山23号		8.7×7.0	9.2×9.1	1.4	箱形木棺1	鉄刀子1	法仏式
小羽山24号		13.0×13.0	16.9×15.2	1.6	箱形木棺2	碧玉管玉15 碧玉管玉40	法仏式
小羽山26号		21.7×20.4	不明	不明	不明	不明	法仏式
小羽山30号		26.0×22.0	33.0×28.0	2.7	箱形木棺1	鉄短剣1・碧玉管玉103・ガラス管玉10・ガラス勾玉1	法仏式
小羽山33号		7.0×5.0	8.6×6.9	1	刳抜木棺1	翡翠勾玉1	法仏式
小羽山47号		4.4×4.4	不明	0.2	不明	不明	法仏式
高柳2号		6.2×5.5	約8×8	削平	削平	削平	月影Ⅱ式
南春日山1号 ※認定に問題		永平寺町	約45×30	約48×38	2	不明	不明
加賀							
一塚21号	白山市	18.0×18.0	27.0×26.0	削平	削平	削平	月影Ⅰ式
一塚38号		11.2×9.7	15.6×15.5	削平	削平	削平	月影Ⅱ式
越中							
杉谷4号	富山市	25.0×25.0	50.0×50.0	3.9	未調査	未調査	白江式(?)
富崎1号		21.7×21.7	27.5×27.5	3	未調査	未調査	月影Ⅱ式
富崎2号		21.7×21.7	27.5×27.5	2.8	未調査	未調査	月影Ⅰ式
富崎3号		22.0×21.0	不明	3.9	未調査	未調査	法仏Ⅱ式
鏡坂1号		24.1×24.1	不明	4.8	未調査	未調査	月影Ⅰ式
鏡坂2号		13.7×13.7	18.0×18.0	3	未調査	未調査	月影Ⅰ式
六治古塚		24.5×24.5	35.0×35.0	5.1	未調査	未調査	月影Ⅱ式

表1 コシの四隅突出型墳丘墓一覧

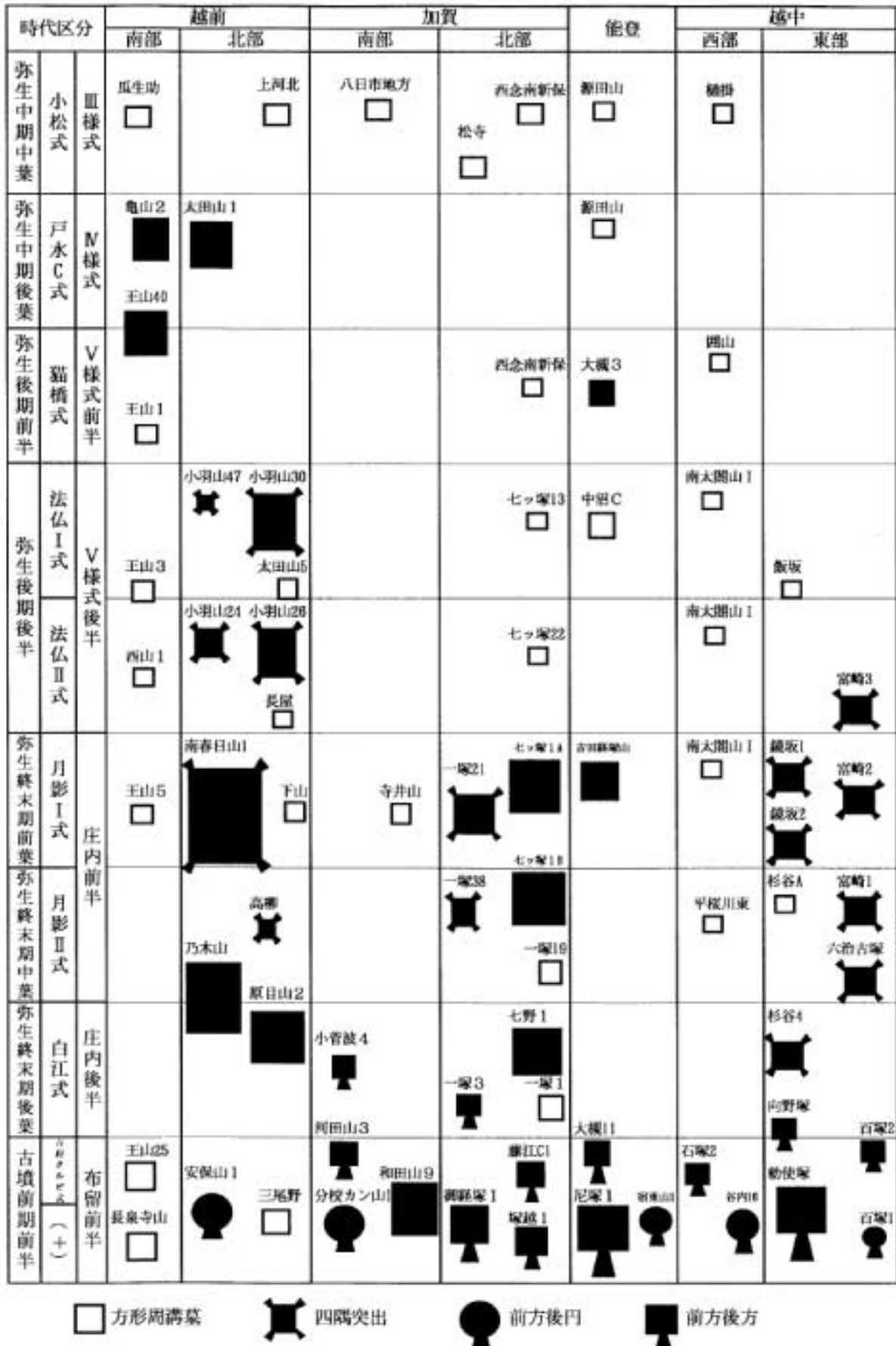


図5 コシの主要弥生時代墳墓編年図

【図版引用文献】

- 図 1. まつおか古代フェスティバル実行委員会 1997 年
『発掘された北陸の古墳報告会料集』
- 図 2. 日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993 年
『東日本における古墳出現過程の再検討』
- 図 3. 婦中町教育委員会 2002 年 『富山県婦中町千坊
山遺跡群試掘調査報告書』
-
-